

「清心」

文責 校長 中原弘之

学校教育目標 「学校と地域を愛し、知・徳・体の調和のとれた児童の育成」

「どんと焼き」「ぜんざい会」大盛況

1月10日（木）にPTA主催で「どんと焼き」と「ぜんざい会」を行っていただきました。雨も止み、風もほとんど無い絶好の天気となり、高さ約2mのやぐらに点火しました。煙や炎も高く上がり荘厳な感じがしました。子どもたちが病気にならず健康に育つようお願いばかりです。

その後の「ぜんざい会」もたいへん賑わいました。前日より準備をし、たくさんのぜんざいやきなこ餅を作っていたり、やぐらの準備をしていただいたりしたPTAの方々に心から感謝申し上げます。また、万が一の火災に備え消防車共々見守っていただいた消防団の方々に、たくさんご参加いただいた地域の方々に厚く御礼申し上げます。

あいさつの気持ち

自分から進んであいさつができる子が増えてきました。登下校中など保護者や地域の方々にも進んであいさつができる子を育てていきたいと考えています。明るく清々しい声であいさつができる子もいますが、声の小さな子もいます。あいさつと同時に頭を下げると気持ちが伝わると指導しています。声が小さくても頭を下げるとあいさつの気持ちを伝えているものとお酌み取りいただければ幸いです。

祇園歴史の旅（その31）「明治維新、そして軍港建設へ」

中部地区町内協議会設立25周年記念誌（平成20年発行）、佐世保史談会会員の筒井隆義さんの記念エッセーより抜粋。「現代の私たちは、佐世保のたたずまいを思い浮かべるとき、市街地を貫く35号国道、そして四ヶ町、三ヶ町から浜田、高砂町を経て市役所に至る南から北へのルートをとります。でも、この2本の道路がつくられる以前は、東の烏帽子岳から海への東西ルートというたたずまいです。市になる前の小佐世保、名切の両免を見ると一目瞭然です。

明治19年（1886）、海軍軍港が佐世保に決定し、まず策定された都市づくり計画は、本通りと呼ばれる四ヶ町三ヶ町通りを核として、その北側に三笠通りを通し、この通りを東西に仕切る通りを設けて、いわゆる碁盤の目状の市街地図を策定しました。

このころの中部地区は、市の中心部だった高砂、常盤、相生から見ると日宇村に近い場末といった観がありました。それが、年を追うごとに人口が爆発的に増え、明治31年（1898）に国鉄佐世保駅が開業すると、一気に市街地は南東の方へ発展して行くのです。この当時、駅の所在地は日宇村福石免で、村境は旧戸尾小学校付近。そこで、行政上も何かと不便なので、明治37年に福石観音から北の日宇福石免を佐世保市に編入しました。

先に述べたとおり、中部地区は大きく名切谷と小佐世保谷の2地区に大別されます。共通するのは、名切が最上部に花園遊郭、小佐世保も同様小佐世保遊郭（勝富）ができたこと。昔は、公娼制があり男性優位が社会の仕組みの大きな要素でしたから、遊郭は当たり前存在でした。加えて、その地区の発展を支えるレジャーランドの意味を持っていたのです。

後年、高天町、京坪、上京、下京が繁華街となるのも小佐世保遊郭の存在が要因です。また、万徳町佐世保重砲兵連隊の門前町として宮田町の風紀が悪化したので、花園町に遊郭を開業した結果として太田町、宮地町、栄町、常盤町、松浦町方面の賑わいが約束されました。

佐世保の中心街は、こうして佐世保川流域から次第に南下し、昭和に入ると一気に加速して国鉄佐世保駅、潮見町へと繁華街化して行きます。明治40年8月15日、与謝野寛を中心とした北原白秋、吉井勇ら若き詩人たちが、異国情緒を求めて旅した「五足の靴」の一行が一夜泊した佐世保は、自分たちの目的に反した新開地の無秩序ぶりに驚きをおぼせませんでした。

しかし、夜になって散歩に出ると、そこに現れる夜店の活況に目を見張ります。翌日朝出港の平戸行き船便を待って、一校が泊ったのは、現在の四ヶ町入口のニシムタ帽子店付近にあった京屋旅館。散歩に出た先はいつも「夜店通り」の名が残る一帯。旅館は一階が人力車夫の留まり場、向かいの湯屋は床屋との兼業でした。」

今回は、「西沢乙吉氏の軌跡」と題して、西沢呉服店創業などをご紹介します・・・。